

特集

産業観光でまちを活性化

観光ニーズの多様化で、注目を集めているのが、産業遺産や稼働中の産業施設（工場や工房）などを活用した「産業観光」。ものづくりにまつわる地域の特色をアピールして、産業振興と観光を活性化する試みとして全国の都市自治体で取り組みが進んでいます。

特集では、産業観光が注目される背景や現状、産業観光を推進するポイントなどについて探るとともに、実際に地域資源を生かし産業観光を推進している都市事例を紹介します。

寄稿 1

産業観光の意義とその振興へ向けて

横浜商科大学商学部貿易・観光学科教授 羽田耕治

寄稿 2

ものづくりのまち 室蘭の観光資源を市民とともに探る

室蘭市長 青山 剛

寄稿 3

躍動する あきしま ～産業観光で まちを元気に～

昭島市長 北川穰一

寄稿 4

既存の観光と新たなにぎわいの創出

常滑市長 片岡憲彦

産業観光の意義とその振興へ向けて

横浜商科大学商学部貿易・観光学科教授

羽田耕治 はだこうじ



産業観光とは何か

産業観光という言葉は、そのかたい響きのためか、必ずしも一般的な用語ではなかった。しかし最近ではマスメディアにもよく登場し、一般的になってきた。地域における産業観光の振興に長年にわたり取り組んできた立場からすると、非常に嬉しい限りである。

産業観光の意味するところは、文字通り、「産業活動を観光資源として利用する観光（活動）」というものであり、その産業活動を広く解釈すれば、農林漁業や製造業、サービス業など、多様な産業生産活動を利用の対象とする観光といえる。さらに、現在では衰退、消失してしまった、古の産業活動の遺産を対象とする観光も産業観光といえることができる。

もともと、こうした産業観光のとらえ方は必ずしも共通のものではない。近代的・現代

的な製造業の生産活動を対象とする観光活動として産業観光を限定的にとらえる考え方も少なくはない。産業観光のとらえ方はさまざまである。

産業観光の歴史と「概念」の広がり

産業観光のとらえ方がさまざまであることの理由として、「観光利用の対象となる産業」が産業社会の発展と変容とともに拡大してきたことが挙げられる。

工業化・近代化が進展した時代は、近代的な製造技術の成果（製造工場・設備・技術・製品）を対象とする観光が産業観光として成立した。国際博覧会の見物などはその象徴といえる。

わが国においては、昭和30年代後半から40年代に大量の周遊観光が発生し、食品製造業のように消費者になじみが深い消費財を生産する工場の中に立ち寄り周遊観光利用に対応し、製品PRの場として観光集客

を意図した工場が開設されるようになる。昭和50年代になると社会の成熟化を背景に近代化に伴う弊害への反省と懐古が生まれ、手づくりの味わい深い伝統的な地場産業に

触れる「工芸観光」が脚光を浴びてくる。そして平成に入り、産業の高度化の波の中で老朽化・陳腐化を余儀なくされた生産施設・設備など―産業遺産を活用した観光施設・観光空間が世間の耳目を集めることとなる。

農林漁業についても工業化・都市化の進展とともに観光の対象となってくる。「グリーン・ツーリズム」という概念が注目されるようになったのは比較的最近のことであるが、そもそも果樹などの農産物の収穫体験・加工体験をはじめとした農業体験観光は戦前から見られ、とりわけ昭和40年代に大きく発展した。都市住民による観光レクリエーション利用と関連付けて農林漁業・農山漁村の振興を図ろうと、農林水産省が本格的に取り組み始めたのは昭和40年代後

半のことである。

いずれにしても、このように産業社会の発展・変容、そしてそれを背景とした旅行者ニーズの変化とともに産業活動を対象とする観光の範囲も拡大し、それと同時に「産業観光」の概念も広がってきたのである。

産業観光への注目の背景

これまで見たとおり、産業観光は産業化（工業化・近代化）が進展した時代より存在していた観光である。それが、なぜ今、注

目されてきたのか。

地域の特性に触れ、学ぶ観光の台頭

全国的にも著名な自然資源や歴史文化資源を有する観光地の多くが今では観光利用の大幅な減少、低迷にあえいでいる。もはや単に美しい自然や壮麗な歴史的事物を見て回るといった、ありきたりの観光では人々は満足しない。自由時間活動への志向が多様化し、消費者の旅行への志向も多様化、そして高度化、深化してきており、そうした中で地域固有の魅力・特性に触れ、体験し、学ぶ、いわば「自己実現・自己啓発」タイプの観光が志向されている。

元来、自己実現・自己啓発は自由時間活動の基本的機能の一つであり、エコツーリズムやヘリテージツーリズムなどもそうした自己実現・自己啓発型の観光であり、現在注目されている産業観光もまた同様である。前述の通り、産業観光は以前より存在したが、従来の産業観光はおおむね「単なる物珍しさからの見物」とどまっていた。対して、現在、脚光を浴びている産業観光は、地域の人々、生産に携わっている（携わったことがある）人々との触れ合いや交流を介した「見学と体験」、そこに生まれる知的充足感がポイントになっているように思われる。

産業観光の振興へ向けた地域側の期待

今や全国1700余りもの市町村のほとんどが観光を通じた地域の活性化に取り組

む時代である。観光とはほとんど縁がなかった、観光の振興には関心がなかった大都市圏に位置する都市においても観光を通じた地域の活性化気運が盛り上がりつつある。そうした中で製造業を主として産業振興に取り組んできた都市では、産業構造の転換・変貌を背景に新たな産業の振興を目指して観光の振興を図ろうとしても観光資源には恵まれないケースが少なくない。そこで持ち前の産業集積を生かし、さらには発展させながら新たな産業振興を図る有力な方策として産業観光の振興が、大都市圏、地方圏を問わず志向されるようになってきているわけである。

産業観光の取り組みによるメリットへの企業側の理解

企業の社会貢献、地域貢献の必要性が指摘されて久しいが、産業観光はそうした企業の社会貢献・地域貢献を企業目的と整合させる格好の手段である。

産業観光に取り組むことによって、企業自体に期待される意義、効果は次のようなものである。企業理念などのPR、社会的イメージの向上、モノづくりの意義・大切さへの理解、人材の育成促進と獲得、製品PRと販売機会の拡大、最終ユーザーからの情報収集、（第三者に見られることによる）工場内の従業者の意欲向上・整理整頓の徹底と品質向上など。企業の特長や立ち位置

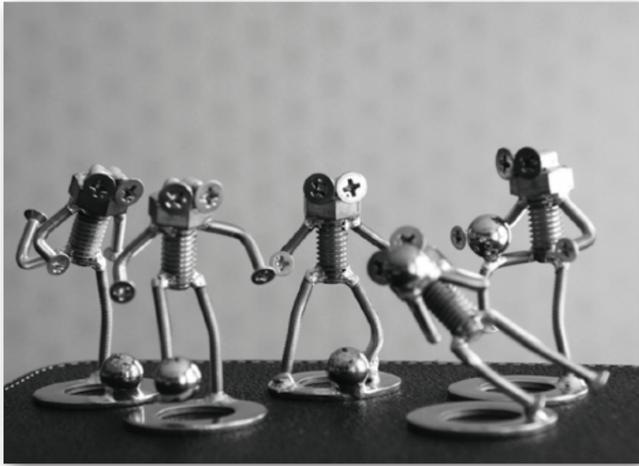


「学びの観光」としての産業観光（川崎市）

ものづくりのまち 室蘭の観光資源を市民とともに探る

ものづくり100年のまち室蘭

平成24年、開港140年市制施行90年を迎えた室蘭市は、北海道の西部の内浦湾（別名、噴火湾）に面し、突出した馬蹄形の半島を有し、天然の良港を有する北日本を代表す



「ボルタ」は、市民や観光客に愛されている鉄のまちのPRキャラクター

る工業都市である。100年以上の歴史を有する鉄鋼をはじめ、石油化学、セメント、造船などの基幹産業に加え、近年ではリサイクル産業としてPCB廃棄物処理事業に取り組み、環境産業とまちづくりを融和した「緑の工業都市」を目指している。

明治5年には、札幌と函館をつなぐ交通の要衝として、噴火湾を隔てた森町との定期航路が開設され開港した。明治25年には、室蘭―岩見沢間に鉄道が敷設され、夕張などの空知地方で産出された石炭の積出港として室蘭港は発展し、明治40年には日本製鋼所、明治42年には輪西製鉄場（現・新日鐵住金室蘭製鐵所）が相次いで設立され、日本の近代化と共に、工業のまちとして歩み始めた。大正11年の市制施行時には、人口が5万人を数えた。太平洋戦争末期には、艦砲射撃の被害も受けたが、戦後、鉄鋼業や造船業は軍需から民需へと転換を図り、日本の戦後復興の一翼を担った。その後、日本石油精製（現・JX日鉱日石エネルギー）などの企業進出もあり、一層の工業都市化

室蘭市長（北海道）

青山 剛



が進み、昭和40年には東北・北海道で初の特定重要港湾（現・国際拠点港湾）に指定され、その重要性はますます高まり、昭和44年に人口が18万人を突破するなど順調な発展を遂げた。しかし、ドルショックや2度にわたる石油危機による経済不況と、それに伴う基幹産業に合理化の波が押し寄せ、人口減少へ一転するなど、多くの試練も受けた。その典型が、鉄のまちのシンボルである溶鉱炉の休止方針である。しかし、官民一体となった存続の取り組みにより存続され、今日では世界の特殊鋼基地へとつながり、現在では、自動車主要部品を製造しており、2次加工、3次加工メーカーの進出に至っている。

製鋼分野では、エネルギー関連製品を多く手掛けており、発電所の心臓部ともいえる圧力容器やタービン、近年では洋上風車の製造も手掛け、風力発電の一貫生産を担っている。これらは、世界最大規模の1万4000tプレス機が、技術の高さを極めている。セメント分野では、リサイクル事業にも積極的に取

などによっても産業観光への取り組み方は異なるが、産業観光が一般的になるに伴って、産業観光への取り組みを通じたメリトへの企業側の理解が深まってきたことも大きい。

産業観光の振興へ向けて 自治体に求められること

産業観光の振興へ向けて、地域として講



産業遺産を活かしたカフェテリア・ベーカリー（桐生市）

じるべき主要な施策を列挙すると、以下の事項が挙げられる。

- ・産業観光資源への「気付き」…産業観光の対象には流通サービス業や農林漁業関連も入る。また小規模であっても特徴ある商品を提供している事業者（老舗店、名物店など）も魅力的な対象となる。
- ・受け入れ企業・施設の組織化と拡大…産業観光振興への理解と協力に向けた気運を醸成する。安全管理や企業秘密保持の問題などから企業の中には利用者の受け入れに消極的な場合が少なくない。そうした企業側の不安を解消するためには、あらかじめ「受け入れ条件」を詰め、明確にしておく必要がある。その上で受け入れ候補企業・施設の受け入れ条件を整理したデータベースを作成する。
- ・産業観光情報の発信…既存の観光関連HPの拡充、産業観光魅力の紹介に特化したパンフレット制作など（含む、産業観光魅力を組み込んだモデル観光コースの設定）。
- ・産業観光ガイドの育成と組織化…受け入れ企業・施設においては当該事業所・施設の社員・職員が案内対応するケースが多いが、地域内各所に散在する対象事業所・施設間を移動する際に案内役を務めるガイド役が不可欠である。地域の産業集積の背景、基盤にある自然風土や歴史

的背景、産業連関もが産業観光魅力となるのであり、そうした地域特性と結び付けた案内が欠かせない。

- ・産業観光振興に対する市民の理解促進…市民向け産業観光ツアーの実施、シンポジウムの開催などによる。
- ・旅行会社へのプロモーション…とりわけ産業観光と親和性の高い教育旅行誘致へ向けた働き掛けを推進する。
- ・産業観光ツアーの商品化…いわゆる「着地型旅行商品」の一環として、産業観光ツアー商品を開発・販売する。

これらの施策は、行政・観光協会・商工会議所などがそれぞれ連携あるいは分担しながら取り組んでいくこととなるが、「どこ」が中心となるか、地域事情もあり、「正解」はない。

筆者自身が「産業観光振興協議会長」として当初より牽引してきた川崎市の産業観光振興の場合は、行政および商工会議所（いずれも立ち上げ、そして継承した担当職員）の力が大きかった。産業観光の振興に当たっても行政に求められることは、「（計画的に）芽出し、後押し、橋渡し」することであり、「橋渡し」の一方を担ぐ関係団体と密な連携体制を組むことであると考える。各都市で産業観光の振興がますます進展することを祈念したい。



室蘭港の入り口に架かる東日本最大のつり橋「白鳥大橋」のライトアップとイルミネーション(上)。目の前に広がる工場夜景で見る人を魅了した夜景見学会(左)



り組んでいる他、造船分野でも、スーパーエ
コシップの製造にも取り組んでいる。新たな
環境産業の取り組みでは、平成20年から、北
海道と北関東以北15県のPCB廃棄物の無害
化処理事業を開始し、全国に貢献する事業に
取り組んでいる。

登別洞爺広域観光圏の中の室蘭

工業都市室蘭は、豊かな天然の観光資源
にも恵まれている。地球岬などを含めた断
崖絶壁が数十km連なる美しい景観があり、
平成24年には文部科学省から「名勝びりカ
カ」として文化財指定を受けている。自然の
豊かさを象徴するのは、野鳥の種類が豊富
なことや鳴り砂海岸を有する他、イルカ・
鯨ウオッチングの拠点となっており、観光
客はもとより地元の子どもたちや室蘭工業
大学生にも喜ばれている。こうした観光資
源をPRしようと、市民観光ボランティア
が観光客にガイド活動を行っている。

一方、近隣には、登別温泉をはじめ北海道
洞爺湖サミット2008の舞台となった洞爺
湖温泉、洞爺湖有珠山ジオパーク、白老町の
アイヌ文化の伝承施設といった魅力が豊富で
ある。全国各地からの旅行者に加え、アジア
圏を中心に、外国人観光客の入り込みも多い。

「ものづくりのまち」が 生み出す観光資源

本市のものづくりは、苦難の歴史を乗り

も販売され、鉄のまちのPRに一役かっ
ている。NPO法人が、商店街の空き店舗を工房
として製作・販売を行うユニークな取り組み
で、反響は大きくなっていった。その後、ポ
ルタを製作する工房での製作体験が可能とな
り、体験型産業観光の基礎が出来上がった。
また、室蘭工業大学でも「ものづくり基盤セ
ンター」を平成18年に開設し、企業との共同
開発や学外向けの体験実習も可能となり、主
に研修旅行生らに、ものづくり体験を通し、

越えてきた。前述の溶鉱炉存続を求める市
民の思いを乗せて点灯を開始したのは「測量
山ライトアップ」である。標高200mに満
たない山の山頂にあるテレビ放送のアンテ
ナを鮮やかな光で彩り、市民がそれぞれの
思いを託して1日4000円を添え応募す
る。昭和63年から連続点灯し、今年7月に
は、9000日を達成する予定であるが、
市民の希望の灯りとして親しまれ、市民力
のシンボルとなっている。

平成10年、室蘭港口に東日本最大のつり橋
である「白鳥大橋」が完成した。構想から40年、
まさに市民の悲願叶って出来た橋である。全
長1380mのこの橋は、室蘭工業大学を含
め市内企業の技術の産物であり、白く大きな
ウイングを広げる優美な姿は、青い港によく
映える。夜になると、隣接する風車で発電さ
れた電気で作るイルミネーションが飾り、昼
夜を問わず力強くもしなやかな姿で、見るも
のすべてを魅了する。

観光にはグルメの要素は不可欠である。噴
火湾に位置する室蘭は、海産物も豊富で、胆
振管内最大の水揚げを誇る。市の魚であるク
ロソイや、ブランド化を図るホタテ「蘭扇」、
スケトウダラなどの魚種も豊富だ。加えて、
市民の味として昔から親しまれているのは
「室蘭やきとり」と「室蘭カレーラーメン」であ
る。室蘭やきとりは、串に豚肉と玉ねぎが刺
さり、洋ガラシを付けて食べるというスタイ
ル。室蘭カレーラーメンは、市内ラーメン店

製作する喜びを与え、理化学分野に関心を
もってもらう取り組みを図っている。

平成21年9月、普段目にしていない夜景が、
観光資源であることを市民に再発見してもら
おうと、市の広報紙で夜景特集を組んだ結
果、大きな反響を呼んだ。臨海部の工場の保
安灯の灯りが、鮮やかな夜景を演出する室蘭
らしさであることに市民は気がつき、まちの
誇りとして感じ始めた。同じ頃、首都圏を中
心に工場夜景観賞がブームの兆しを見せ、幅
広い年齢層からの観光コンテンツとして人気
が高まり、平成23年2月に、川崎市、四日市
市、北九州市に本市を加えた4市で、日本四
大工場夜景宣言を行った。昨年は、4市に周
南市を加えた全国工場夜景サミットを室蘭で
開催。全国に向けて工場夜景の美しさや力強
さなどの魅力を発信するとともに、工場夜景
観賞を観光資源として取り組む都市間連携を

から広まり、札幌の味噌味、旭川の醤油味、
函館の塩味に続く北海道第四の味として定着
している。いずれも塩辛いものを好むとされ
る職工さんが労働のあとに口にすると、ものづ
くりのまちが生んだグルメと言える。

産業観光のアプローチからみた 新たな可能性

世界に誇る匠のたくみものづくり技術現場の見学
や体験は観光資源に生かせることから、平成
10年改訂の観光振興計画内で、「工場群と企
業所有施設を活用した産業観光開発を進め
る」と記しており、翌年より、産業観光振興
の具体的な取り組みが始まった。「ものづくり
と産業観光」をテーマとしたシンポジウムを
契機に、工場見学会など、市内企業の協力を
得て実施された。それまでも、学生の社会科
見学など、受け入れ実績はあるものの、稼働
中の工場に一般客を受け入れることは、安全
面での十分な配慮を要することなどから、観
光を目的とした見学は慎重な企業もあり、課
題は残る。

「鉄のまち」と言われる室蘭に、鉄をイメー
ジする工芸品がないという市民の声の高まり
から、平成17年には大学生や商店主らが協力
し、手のひらサイズのボルト・ナット製の人
形「ボルト」を開発した。無機質な材料だが、
愛くるしいポーズが市民の間で人気を呼ん
だ。ハンドメイドの100種類以上のボルト
は、新千歳空港や札幌市内の土産物店などで

深め、魅了向上に努めることを確認した。ま
た、サミットに合わせて、JX日鉱日石エネ
ルギー室蘭製油所の夜景見学会を全国で初め
て実施し、迫力ある工場夜景を身近に感じた
ほか、養成された市民ガイドも活躍するな
ど、大きな成果を上げた。工場夜景は、幾多
の試練を乗り越えた歴史の輝きであり、今後
の産業の希望を与えてくれる情景である。

これらの動きが奏功し、昨年あたりから新
たな動きがいくつか生まれている。北海道を
築く基礎となった三都(室蘭、小樽、空知)の
つながりをクロズアップした「炭鉄港」事業
は、それぞれが他を学ぶ広域的な産業観光の
動きだ。新たな魅力を情報発信することで、
映画やテレビのロケ地として数多く採用さ
れ、経済効果も生んでいる。また、天然の良
港や周辺観光地への評価が高いことから、ク
ルーズ客船の寄港が相次いでおり、今年は過
去最多の8隻が室蘭港に入港する。中でも、
13万8000t級のクルーズ船入港も予定さ
れており、外国人客へのおもてなしには市民
力が不可欠である。

産業観光は、産学官民が連携し、地域の自
然、産業、生活、歴史、文化などの地域固有
の素材を発掘し、観光資源化することで新た
な交流を生む。推進にあたっては、市民に地
域資源を再発見・実感してもらい、ものづく
りのまちとしての自信と誇りを持ってもらう
ことが大きなポイントであろう。

躍動するあきしま 産業観光でまちを元気に

昭島市長（東京都）

北川穰一



はじめに

平成25年度の政府の経済見通しによれば、わが国の経済は、世界経済の緩やかな回復が期待される中で、日本経済再生に向けて、大胆な金融政策、機動的な財政政策、民間投資を喚起する成長戦略の「三本の矢」により、長引く円高・デフレ不況から脱却し、着実な需要の発現と雇用創出が見込まれ、景気回復へ向かうことが期待されている。しかしながら、海外経済の不確実性や電力供給の制約などにより、先行きの不透明性は払拭できていない状況にある。

こうした中、基礎自治体である本市としても、全てを国や東京都に委ねるのではなく、さまざまな産業振興策を展開し、地域からも景気回復の取り組みを進めていかなければならないと考えている。

市の概要

昭島市は、東京都のほぼ中央に位置し、11万3000人を超える人口を有するまちである。多摩川や玉川上水、市内に点在する湧水や

ている。取り組みは大きく分けて次の4つに分類される。

1 地下水100%の水道水の活用

地下水100%の水道水は、食品や嗜好品などにも活用され、観光資源としてのポテンシャルも高く、その可能性が十分生かされるよう環境整備を進める。

2 観光資源となる企業の活用

筆筒や椅子を中心に国内外の歴史上の家具を展示する「家具の博物館」、日本のジェットエンジンの歴史をたどることができる「空の未来館」、そして、ものづくり企業の生産現場などを見学する取り組みを行い、企業の有する施設を産業観光資源として活用する。

3 駅を中心とした観光まちづくりの推進

平成27年度を目途として、JRの青梅線、五日市線、八高線と私鉄の西武線が乗り入れる拝島駅前を開発を進めていく。この拝



北泉寮

島駅をはじめ、市内の各駅を市外から多くの人に訪れてもらうための重要な拠点とし、産業観光の新たな視点から観光まちづくりを進める。

4 観光ウォーキングコースの開発

市内には、「北泉寮」や「青年学

樹林地など、比較的豊かな自然に恵まれ、豊富な地下水は、都内で唯一の地下水100%の水道水としてわれわれの生活を潤し、かけがえのない市民共有の財産となっている。

昭和36年に多摩川でくじらの化石がほぼ完全な形で発見され、「アキシマクジラ」と命名された。日本がまだ大陸と地続きであったであろう頃、昭島市の周辺が古東京湾の波に洗われる海浜であり、多摩川の河口となっていたことが想像される。現在は、公園やイベント、そして銘菓などにくじらの名前を取り入れるなど、本市をアピールするシンボルとなっている。

市の中央を東西に走る青梅線沿線を中心として、中神工業団地などに電子機器や輸送用機械器具関連などの製造業が集積し、一方、国道16号線の拝島橋周辺には物流会社の配送センターが集中している。また、中小企業や農林水産業を経営、技術、人材面から支援する東京都の「産業サポートスクエア・TAMA」が平成22年に市内に整備され、多摩地域の新たな産業支援拠点となっている。

昭島市は、交通アクセスにも恵まれ、自然環境と暮らしの近代化を支えた人材を輩出した文化・教育資源がある。市民ボランティアである「あきしま町あるきナビゲーター」のガイドにより、こうした施設や市内企業の生産現場などを見学する「あきしま町あるきツアー」を実施しているが、本市の魅力を市の内外に知ってもらう機会として、今後も、誰もが気軽に参加できる観光ウォーキングコースの開発を進める。

本市の考える産業観光とは、地域の構成主体である市民、事業者、団体、行政が相互に連携、協力をし、地域の歴史や文化、産業、自然など、さまざまな観光資源を生かしながら人々の交流を促進し、にぎわいと活力あふれるまちを実現していくものである。その実現のためには、観光まちづくり協会をはじめ、市民や企業、そしてさまざまな団体が主体的にかかわり、ともに連携し、昭島市の魅力を見つめ、わがまちに自信と誇りを持つことが重要であると考えている。

産業観光の具体的な取り組み

1 観光まちづくり協会

平成23年2月に観光まちづくり協会を設立し、4月には昭島駅北口に観光案内所を開設した。市では観光まちづくり協会の運営費を助成し、協会を中心として、訪れる人の多様なニーズに応えた本市の観光資源の活用や、観光案内所の多面的な活用を図っている。

2 フードグランプリなどのイベント

昭島駅の北側に位置する昭和の森内の銀杏並木で、昨年11月に初めて「昭島ブランド・フード

境と暮らしと、そして産業が調和した都市として発展してきた。

産業観光の基本的な考え方

平成23年から10年間を計画期間とする第5次総合基本計画では、市の将来都市像を「ともにつくる 未来につなぐ 元気都市 あきしま」人も元気 まちも元気 緑も元気」とし、市民の皆さまとともに力を合わせて、人も、まちも、緑も健康・健全で、活力と魅力にあふれた元気なまちを創り上げ、次世代に責任をもって引き継いでいく、このことを新たなまちづくりの大きな目標としている。

人が集い、にぎわいを創り出す、魅力と活力にあふれた元気なあきしまを実現していくためには、市内の企業や事業者が元気でなければならぬ。地域経済の活性化は、税収や雇用などに大きく関わり、市民生活の向上に直結するからである。

本計画では、目標を達成すべき施策のひとつとして産業の活性化を掲げており、あきしまらしさを生かした産業観光を進めていくこととし



フードグランプリ(表彰者)

「フードグランプリ」を開催した。このフードグランプリは、市内の商店や団体が自慢の料理や商品を出品し、昭島ブランドを創りあげることが目的とするもので、商工会、市内企業、関係機関などから、協賛金や実施方法などの面において、多大な理解と協力を得て実施することができた。併せて、市の職員が各店舗にボランティア参加し、職員のまちづくりに対する意識を醸成することもできた。

今後、市内の農畜産物やものづくり企業などの製品を紹介し、販売する「産業まつり」、商工会が中心となり花火の打ち上げやくじらのパルーンを先頭に市内をパレードする「くじら祭」、観光協会が中心となり昭島に古くから伝わる山車や囃子、神輿などの伝統芸能を一堂に会して実施する「郷土芸能まつり」などととも、昭島



陶製招き猫

既存の観光と 新たなにぎわいの創出

はじめに

常滑市は、愛知県知多半島の西海岸の中央に位置し、西は伊勢湾に面している。名古屋までは電車で約30分、車で約40分の距離にある。昭和29年4月1日に市制施行し、平成26年4月に市制60周年を迎える。人口は、平成17年2月の中部国際空港セントレアの開港後、空港関連従業員の転入やニュータウン事業の進捗などにより、増加しており、平成25年2月1日現在、5万6692

人である。

日本六古窯のひとつに数えられ、千年の歴史を誇る焼き物のまちである。昭和30年代には、300から400基の煙突があったといわれ、黒い煙が空になびいていたため、「常滑のスズメは黒い」と言われていた。小判を抱えた2等身の陶製招き猫は、常滑系と呼ばれ、全国の約8割が生産されている。

近年の主な産業と今後

主要産業の常滑焼は、伝統的工芸品である急須や植木鉢、招き猫などの置物の生産で知られている。最近では、焼酎サーバーや陶器の浴槽など、新たな製品開発を行い、市場拡大を図っている。建築陶器や衛生陶器の大手メーカーである(株)INAX(現(株)LIXIL)は、常滑市が創業の地である。昨年、東京駅復元に積極的に取り組んだ(株)LIXILは、市内のタイムメーカーとともに、ものづくりの経験と実績を

駆使して、現存する赤れんがと違和感なく調和する復元れんがを作製し、価値ある産業文化事業に常滑焼の陶業の実力を後世に残すこととなった。

また、温暖な気候と豊かな自然に恵まれ、ノリの養殖などの水産業やイチジクを始めとした農産物の出荷も盛んに行われている。

中部国際空港セントレアは、日本で3番目の国際拠点空港として、伊勢湾海上に開港した24時間空港であり、約1.2kmの道路橋および鉄道橋で市街地と結ばれている。また、空港島と空港対岸部は「中部臨空都市」と呼ばれ、愛知県により埋め立て造成された。空港を核とした陸・海・空の交通アクセスに優れた立地と最先端の都市機能を備えた次世代型産業拠点として、分譲中である。平成23年12月には、空港島の一部が「アジアNo.1航空宇宙産業クラスター形成特区」に指定されたことに伴い、中部地方の次世代成長産業として航空宇宙分野への期待が

常滑市長(愛知県)

片岡憲彦



の元気・魅力を発信するイベントとして、引き続き実施していく。

3 産学官連携による取り組み

平成25年度においては、関東経済産業局や産業サポータースクエア・TAMAなどの国や東京都の関係機関、多摩地域の大学、商工会、事業者ネットワーク、そして金融機関などで構成する(仮称)「産学官検討委員会」を立ち上げ、観光産業をはじめとした産業振興の方向性を確かなものとし、その後の具体的な取り組みにつなげていきたいと考えている。

産業観光の課題

産業観光の拠点となる観光まちづくり協会は、設立から3年目を迎え、真価が問われる年となる。市ではこれまで協会に対し運営費を助成してきたが、将来的には協会が自主財源を確保し、その財源において、自立した運営をすることが望ましい。しかし、景気の低迷などの影響もあり、観光まちづくり会員が増えず、また、観光案内所における売上げも伸び悩むなど、まだまだ、その道のりは厳しいものがある。今後は、自主財源の確保という視点を重視した事業の展開も含めた取り組みを推進していく必要がある。

次に、昭島の水に付加価値をつけて観光資源にすることについてである。昭島の地下水100%の水道水そのものを商品として販売することは、さまざまな事情から困難性があるが、市の誇れる観光資源でもあることから、柔軟な発想のもと、昭島の水を利用してつくる特産品

の開発や自然環境に配慮したシステムづくりなどについて、さらに検討していく必要がある。

次に、商工会と観光まちづくり協会との連携の強化についてである。本市の観光産業の中核ともなる両機関の連携が十分に行われているとは言えない状況である。商業、工業、建設の各分野の企業や事業者で構成される商工会の持つノウハウを産業観光に反映させることは重要であり、市が橋渡し役となって商工会と観光まちづくり協会の連携をさらに深めていかなければならない。

次に、地域間交流の促進についてである。青梅線、五日市線、八高線沿線エリアには約50万の人口があり、併せて観光などで多くの集客を期待できるポテンシャルがある。現在、「青梅線沿線地域産業クラスター」という産業支援のネットワークにおいて五日市線や八高線も含めた地域間交流を進めている。今後は、それぞれの地域の特性を生かした地域間交流ブランドを検討するなど、西武線沿線エリアも含めた広域的な産業観光を推進していく必要がある。

結び

本市は、平成23年に社団法人日本観光協会から産業観光まちづくり大賞奨励賞を受賞した。これは、市内企業や商店会、市民ボランティアなど地域が観光によるまちづくりに一体となって取り組む姿勢や、今後の産業観光の大きな可能性に対して高い評価をいただいたものである。昨年は、産業や企業の建て直しなどの調査を目的として、遠くスウェーデンから、議員など

で構成する26人の視察団が本市を研修視察し、有意義な情報交換の場を持つことができた。

本年には「スポーツ祭東京2013」が開催され、本市では軟式野球競技を行う。会場となる昭島市民球場は、東中神駅からのアクセスが良いことから、駅周辺から会場まで、色とりどりの花や歓迎装飾を施すとともに、市の特産物の販売や市内企業の紹介なども行う予定である。この「スポーツ祭東京2013」を機に、昭島市の魅力を全国に発信していきたいと考えている。

「人・まち・緑の共生都市 あきしま」を将来都市像とする第4次の総合基本計画、そして「ともにつくる 未来につなぐ 元気都市 あきしま」を将来都市像とする新たな第5次総合基本計画に基づいて、将来を見据え、市民、企業、商工会、観光まちづくり協会などの関係機関、そして昭島市議会のご指導とご協力を得ることも、市の職員の尽力により、これまで市長就任以来16年にわたり昭島のまちづくりを推進してきた。その結果、元気都市あきしまの実現に向け、徐々にではあるが、これからの産業観光によるまちづくりの形が見えてきた。

今後は、市内に点在する産業施設などを魅力ある観光資源として市の内外に発信し、産業観光のさらなる推進に向けて、観光まちづくり協会の取り組みを支援するとともに、商工会などの関係機関との連携を深めて、物心両面から昭島らしい観光のまちづくりを推進してまいり所存である。

高まっている。本市としても、先端産業の一大集積地となるように、地域を挙げて取り組んでいきたいと考えている。

産業遺産の活用と課題への取り組み

昭和49年に、市の中心市街地であり、焼き物産業の中心地であった地区に「やきもの散歩道」をコース設定した。標高3mから20m



土管坂

と起伏に富んだ地形に、土管坂を始めとした土管・焼酎瓶の擁壁、陶器を埋め込んだ路地、れんが造りの煙突など、常滑焼千年の歴史が肌で感じとれる屋外型の産業観光エリアとなっている。主な公共施設は、国の重要有形文化財「登窯」、その隣に休憩や土産物が購入できる登窯広場展示工房館、約150年前に栄えた廻船問屋を復元整備した市の文化財「廻船問屋瀧田家」、そして焼き物文化の創造と発信の地「とこなめ陶の森(資料館、陶芸研究所、研修工房)」がある。

また、コース内には、ものづくりの心を伝える、体験・体感型ミュージアムの「INAXライブミュージアム」、陶芸作家の工房やギャラリー、飲食店なども軒を連ねている。大正・昭和の雰囲気を残す古いまち並みは、たびたび映画やテレビのロケ地に選ばれている。

産業遺産を生かした観光資源の「やきもの散歩道」への来訪者は、年間約29万3000人(平成24年実績)で、名古屋をはじめ愛知・岐阜・三重の東海3県在住の50歳代以上の女性グループが中心となっている。一方、約300世帯が、「やきもの

散歩道」としてコース設定された地区に居住しているが、窯業とは関係のない住民も生活している。

来訪者が増加するにつれ、住民の生活面での負担や制約、来訪者とのトラブルも起こってきた。また、地場産業「常滑焼」の長期低迷による廃業に伴った、れんが造りの煙突・窯・工場などの取り壊しと、空港開港による、戸建・集合住宅の建設が急増し、景観を維持していくことが困難となっている。

このような背景から、平成18年度に「常滑市観光まちづくり推進協議会」を組織し「常滑やきもの散歩道 観光まちづくりコミュニティ」を事業として、住む人・働く人・訪れる人の相互理解と協力関係の構築に向けて」と題した調査を、住む人・働く人・訪れる人を対象に実施した。その結果、観光地として歩んでいくことの課題が整理された。

課題の一つは、「観光資源を保全する仕組みがない」ということであった。れんが造りの煙突などは、魅力的で保全すべき貴重な地域資源であり、観光資源になり得ることが再認識されたものの、それらを保全していく仕組みがなかった。こうした地域資源が住民の所有物であることについて、営業

者などの認識が希薄でもあった。

浮き彫りになった課題に対して、住民、来訪者、営業者、行政、ボランティアなど、立場の異なる者が相互に理解した上で連携しながら、解決に向けて積極的に進めていくことが、産業遺産を生かした観光につながると思われる。

平成22年4月、れんが造りの煙突などの地域資源を保全することを目的に、やきもの散歩道Aコースの沿道および周辺を対象地域として、「常滑市やきもの散歩道地区景観計画」を定めた。これは、景観計画区域内で行う建築行為などに対し、一定の基準を設け、良好な景観形成を図るものであった。この地では、今も「ものづくり」が受け継がれているとともに、まち並みに誇りを持つ人々が生活していることにより、支えられ、そして守られている。こうしたことから、今後の景観形成に関する取り組みは、ものづくりや生活を続けることができるような、まちづくりと一体となって進めることが重要となる。そして、住民一人ひとりが住んでいるまちに誇りを持つことこそが、まちづくりの第一歩ではないかと考える。

時代とともに産業観光の魅力をアップ

平成24年5月、中部国際空港セントレア

のアクセスプラザ1階に、常滑市の観光案内所とポートルースの場外舟券発売場の機能を併せ持った「オラレセントレア」がオープンした。焼き物のまちにふさわしく、上海万博で話題となった「黄金のトイレ」、ポートルースの6色にちなんだ「6色の陶製招き猫」、そして超特大サイズの「常滑焼の大急須」が展示されている。

また、空港対岸部に位置するりんくう地区に、平成24年12月、工場見学のできる観光施設「めんたいパークとこなめ」がオープンした。これまでは、ホテル、結婚式場、大型飲食店などが進出していたが、大規模な来訪者の見込める施設が初めて進出し、週末には、大勢の来館者でにぎわっている。今年4月には、小型艇から大型艇まで保管に対応できるマリナー施設、8月には中部地区1号店となる会員制大型倉庫店、



めんたいパークとこなめ

平成26年には大型商業施設がオープンする予定であり、にぎわいの創出の成果が徐々に見え始めている。これらにより、常滑市への来訪者は増加すると思われる。また、りんくう地区へ進出する施設を持つ集客力と、伝統ある常滑焼の文化を基軸とした産業観光との融合による相乗効果が、大いに期待される。一方で、本市の産業観光を発展させていくためには、住民や来訪者の意識変化などに柔軟に対応した上で、伝統ある常滑焼の文化に関する情報発信を続けていくことが肝要である。今後も、観光立市を目指し、一層の注力をしていく。